

ヨハネの手紙第一2章27節 「御子からの注ぎの油」

1A 知識による感わし

2A 注ぎの油

1B 聖なる方からの油

2B 御父を知る幼子

3A 教える方

1B 自分に引き寄せる偽教師

2B すべての真理に導かれる方

4A 御子に留まる教え

本文

ヨハネの手紙第一2章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、ヨハネ第一2章17節まで来ました。午後礼拝で、18節以降を一節ずつ見ていきたいと思えます。今朝は、27節に注目します。「しかし、あなたがたのうちには、御子から受けた注ぎの油がとどまっているので、だれかに教えてもらう必要はありません。その注ぎの油が、すべてについてあなたがたに教えてくれます。それは真理であって偽りではありませんから、あなたがたは教えられたとおり、御子のうちにとどまりなさい。」

今朝は、みことばの教えにおける聖霊の働きについて、じっくりと見ていきます。聖書のことばについて、しばしば言われるのは、「子どもで知ることのできる真理だが、聖書の博士でさえ理解できないつまずきをもたらす。」ということです。ヘブル語やギリシア語を駆使する聖書学者が、なんとイエスを自分の救い主として信じていません。「神は存在しない」と言いながら、私はクリスチャンだと言う聖書学者もいます。しかし、小学生が、聖書に書かれていることを、そのまま受け入れて、真理を理解しているのを、私は、かつて子供たちに聖書を教えていた時に、たくさん見てきました。

1A 知識による感わし

私たちはとかく、「自分は聖書を理解していない。難しい内容だ。だから、自分は、聖書をもっと知っている人たちから聞いていかないとけない。」とってしまいます。そこに書かれている文の意味、文化的、歴史的背景、神学的な考察など、それらが分かれば、聖書は分かるのではないか？と思えます。そこに付け込んでくるのが、偽教師たちです。彼らは聖書をよく知っています。彼らの語る各部分は、全く正しい場合が多いです。けれども、その教えを受け入れて行けば、聖書に明確に書いてあることを、真っ向から否定するようになっていきます。

それが、まさにヨハネがこの手紙を書いている背景にあります。「知識」ギリシア語で「グノーシス」

と呼ばれるもので、多くの心定まらない人々を惑わし、キリストに対する信仰から引き離すことが起こるのです。それをヨハネは、反キリストと呼んでいます。しかしヨハネは、信仰の幼子のような人たちに対して、「あなたがたは、真理を知っているのです。なぜなら、注ぎの油があなたがたのうちに留まっているからです。」と励ましています。

これからじっくりと見ていきますが、注ぎの油とは、聖霊の働きのことです。聖霊の働きによって、初めて真理を真理として知ることができ、それで知識に達するのです。ですから、真理は知的能力に関わりなく、むしろ、神との関係によって得るものなのです。

2A 注ぎの油

1B 聖なる方からの油

20 節には、「あなたがたには聖なる方からの注ぎの油があるので、みな真理を知っています。」と言っています。聖なる方からの油注ぎとは、旧約聖書において、祭司、また王が任命を受け、その務めを果たすために受けるものでした。祭司については、こうあります。「出エジ 40:15 彼らが油注がれることは、彼らの世々に渡る祭司職のためである。」主のもの、聖なる者とされて定められ、守られています。さらに、主に仕えるための祭具にもすべて油を注ぎます。それらが聖なるものとなるため、つまり、他の使用とは異なる、神のものだけに使われるためです。

私たちはとかく、自分の能力や知性、経験が、主にお仕えするのにとても必要であると考えます。いいえ、私たちがどうか？ということではなく、主が選び、召した者たちが、この方からの聖なる油注ぎを受けているかどうか、すべてかかっているのです。

そして、王を主が選ばれる時も、油を注ぎました。ダビデのことを思い出してください、少年であった彼は、預言者サムエルから油を注がれました。そして、ダビデがサウルから命を狙われていた時のことを思い出してください。エン・ゲディにいた時に、サウルが同じ洞穴にやってきて、用を足していました。彼を殺す最大のチャンスが訪れましたが、彼はそれをしませんでした。理由は、こう言っています。「I サム 24:6 私が主に逆らって、主に油注がれた方、私の主君に対して、そのようなことをして手を下すなど、絶対にあり得ないことだ。彼は主に油注がれた方なのだから。」主が、その人をご自身の目的のために用いることを決めているので、触れたら、主が御怒りを示すということでもあります。

今朝、読んだ詩篇には、ヤコブの家族そのものが、油注がれた預言者のように、周囲のカナン人の王が触れないように主が守ってくださっているというものです。「115:15 わたしの油注がれた者たちに触れるな。わたしの預言者たちに危害を加えるな。」

そして何よりも、油注ぎという言葉が、メシアというヘブル語です。油注がれた方という意味です。

神に選ばれ、使命を果たすために油が注がれます。イザヤが、イエスについて預言しました。「イザ 61:1 【神】である主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、心の傷ついた者を癒やすため、【主】はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を告げ、」主ご自身の霊がこの方にあります。そして、福音を伝え、傷ついた者を癒し、捕らわれ人に解放、囚人に釈放を告げるために、この方に油を注いでいます。」

したがって、今、ヨハネが第一の手紙で語っている、油注ぎは、聖なる方による守りがあるという意味があるでしょう。また、触れたら主がただでは済まない、という恐れを周囲に抱かせるものです。そして、主イエスご自身、キリストご自身がおられるという意味も含まれていることでしょう。反キリストは大勢いるけれども、あなたがたには、まことの油注がれた方キリストがおられる、ということなのです。

そして、今、読みましたイザヤの預言ですが、イエスの上には、主の御霊が留まっていた、それで油注がれていたと続いています。その注ぎの油と、聖なる方の御霊の働きが密接に結びついています。

預言者ゼカリヤは、七つの枝のある燭台、メノラーの幻を見ました。そこに、オリーブの木から直接、油が注がれている姿を見ます。「4:2-3 私が見ると、全体が金でできている一つの燭台があります。その上部には鉢があり、その鉢の上には七つのともしび皿があります。この上部にあるともしび皿には、それぞれ七本の管が付いています。また、そのそばには二本のオリーブの木があり、一本はその鉢の右に、もう一本は左にあります。」そして、木から出て来ている油について、御使いがゼカリヤに答えます。「4:6 彼は私にこう答えた。「これは、ゼルバベルへの【主】のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって』と万軍の【主】は言われる。」万軍の主の霊を示していました。

2B 御父を知る幼子

ここで、ヨハネが、特別な人々に油注ぎがあることを話していません。「みな真理を知っています」と言っていますね、18 節で「幼子たち」と呼んでいる人々です。信仰をもって間もない人たちにも、油注ぎがあることを教え、またみな真理を知っていると言っているのです。

惑わす者たちは、そう語りません。光が与えられ、知識が与えられているのは一部の者たちだけだというエリート主義を持っていました。そうして、素朴な信仰の人々の集まりを見下して、「真理がすべて明かされていないところには、いることができない」として、そこから離れていくのです。しかし、真理というのは、御子を信じる者たちがみな、知っているものなのです。キリスト教会の世界で、他の教会を不必要にこき下ろして、いかに真理を知らないのかを批判し、自分たちこそが正しい、真理を知っているとするのは、まさにヨハネの時代の、グノーシス的な異端にある問題でした。

ここ 27 節では、油注ぎについて、「御子から受けた油注ぎ」と呼んでいます。聖霊は、イエス様から与えられたもの、賜物です。「ヨハ 14:16 そしてわたしが父にお願いすると、父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてくださいませ。」イエス様が父なる神に願われて、それで私たちに聖霊が与えられました。御子は、御父との信頼関係を持っています。御霊によって、私たちが今、神を「アバ、父」と呼ぶことのできる関係をくださいました。私たちは、天地創造の神を父と呼ぶことのできる関係に入れさせていただいているのです。知識といっても、情報の集積の知識ではありません。人格的な信頼関係の知識です。

そして、注ぎの油が「とどまっている」と言っていますね。ある時に御霊がおられて、またある時に去って行ってしまふ、ということではないのだということです。かつてダビデは、バテ・シェバと姦淫の罪を犯した後、悔恨の祈りを献げましたが、その時に「詩篇 51:11 私を、あなたの御前から投げ捨てず、あなたの聖なる御霊を私から取り去らないでください。」と言いましたが、確かに当時は、そういうことがありました。自分の前のサウル王が、主の御声に聞き従わなかったので、御霊が彼から離れ去りました（I サム 16:14）。しかし、主がご自分の血で私たちが洗い清められた今、その御霊の証印は決して取り消されることはありません。

新しい契約の特徴は、外にある律法ではなく、心に律法が書き記されるところにあります。「エレ 31:31-34 見よ、その時代が来る——【主】のことば——。そのとき、わたしはイスラエルの家およびユダの家と、新しい契約を結ぶ。32 その契約は、わたしが彼らの先祖の手を取って、エジプトの地から導き出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破った——【主】のことば——。33 これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうである——【主】のことば——。わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。34 彼らはもはや、それぞれ隣人に、あるいはそれぞれ兄弟に、『【主】を知れ』と言って教えることはない。彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るようになるからだ——【主】のことば——。わたしが彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。」そして、エゼキエル書では、新しい契約が、御霊が注がれて、石の心から肉の心に変えられるということで成就することを教えています（36:26）。

3A 教える方

だから、次の言葉をヨハネは、語っています。「だれかに教えてもらう必要はありません。」これは、誰からも教えを受けてはいけない、自分自身で教えることができるということではありません。現に、この手紙でヨハネが教えているのですから、そういったことを言っているではありません。主ご自身が、教師を立てられて、牧師また教師の働きによって、聖徒たちが奉仕の働きのために整えられることが、エペソ 4 章で書いてあります。

1B 自分に引き寄せる偽教師

そうではなく、これら反キリスト、偽教師は、教えについて話しています。自分自身を頼りにしないといけないように教えられる必要はない、ということです。ガラテヤの教会の人たちに対して、パウロは、偽教師についてこう話しました。「ガラ 4:17 あの人はあなたがたに対して熱心ですが、それは善意からではありません。彼らはあなたがたを私から引き離して、自分たちに熱心にならせようとしているのです。」自分たちに熱心にならせているのです。

例えば、エホバの証人がいます。彼らは、聖書を正しく解釈するためには、「目覚めよ」という雑誌など、彼らの教師たちの解釈が必要だとします。そこから離れたら、真理から離れていくとみなしています。このような大きな団体のみならず、正統なキリスト教会の中でさえ、「この教えがなければ、正しく聖書解釈ができない」と豪語する人たちがいます。これは危険です。この教えがなければいけない、ではないのです。聖書を普通に読んでいけばよいのです。そして、聖書を教える者は、聖書を普通に読んで、そこに収まること以上のことは話さないのです。それ以下のことも話しません。そして、その人はいつも、学んでいる一人一人が、イエス・キリストご自身に導かれてほしいと願っています。自分に引き寄せるのではないのです。

2B すべての真理に導かれる方

正しい教師と、偽教師の大きな違いは、聖霊の働きを受け入れているかどうかなのです。「ヨハ 14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」聖霊こそが、すべての真理に導くように教え、またイエスのお語りになったことを思い起こさせてくださいます。偽教師は、自分の教えに留まらなければ真理にいることはできないとするのです。

ですから、自分が聖書から教えを聞く時に、それは今まで自分になかったものを聞かされて、それを確信もないのに、やみくもに受け入れなければいけないというものではありません。すでに知っていること、すでに持っている真理を、明らかにされていくということです。すでに、御霊が内に住んでおられるからです。パウロが、世の知恵によってはキリストを知ることはできない話を、コリント第一で話しました。「Iコリ 2:13-14 それについて語るのに、私たちは人間の知恵によって教えられたことばではなく、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばによって御霊のことを説明するのです。14 生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらはその人には愚かなことであり、理解することができないのです。御霊に属することは御霊によって判断するものだからです。」御霊の働きに、みなさん、自信を持ちましょう。

4A 御子に留まる教え

そして最後に、ヨハネは、「あなたがたは教えられたとおり、御子のうちにとどまりなさい。」と言います。そう、ここに戻っていいのだよ、と励まし、慰めているのです。24 節で、「あなたがたは、初

めから聞いていることを自分のうちにとどませなさい。もし初めから聞いていることがとどまっているなら、あなたがたも御子と御父のうちにとどまります。」と話していました。御子を信じることによって、御霊の賜物が与えられています。御子にとどまることによって、御霊が教えてくださいます。その関係にこそ、あらゆる惑わしから自分を守る盾があるのです。

しばしば、世間では「正しく恐れる」という言葉があります。それは、例えば放射能漏れが、福島原発で起こった時に、放射能というのはこの自然界にもいくらでもあるという知識であるとか、恐れる必要のないことを恐れないということです。逆に、この数値になったら速やかにその場から離れないと、健康に被害の及ぶ被爆量に達するであるとか、知っておかないといけません。やみくもに恐れる必要はないが、正しく恐れるのです。

霊的にも同じです。今の時代、惑わしの霊は強く働いています。いたるところに、偽りの教えがあります。キリスト教会の中にさえあります。いや、教会の中にあるからこそ、クリスチャンであっても騙されてしまうのです。けれども、恐れる必要はありません。教えられたとおりに、御子にとどまっていればよいのです。とても地味な営みですね、信仰というのは。けれども、その小さな種のような信仰が、多くの実を結ばせるようになります。御子に留まるのです。